

東アジアとキリスト教研究

平和・ナショナリズム

文学研究科
芦名 定道

概要

- はじめに
- 平和形成への貢献？（前回）
- キリスト教とナショナリズム（今回）
- むすび

はじめに（１）

アジアのキリスト教

1. アジアの諸地域とキリスト教の多様性

西アジア／中央アジア／南アジア／東南アジア／東アジア

2. アジア・キリスト教の共通性

- ・近代初頭における第一の大規模な伝播（第一の波）と、19世紀以降の第二の大規模な伝播（第二の波）
- ・近代化の過程とキリスト教布教との関連

3. 近代化の過程においてアジア・キリスト教が果たした二面的な意味

西欧列強のアジア支配の正当化／近代化への貢献（教育、医療、人権など）

4. 近代日本における近代化政策

5. 欧米の近代キリスト教の諸問題がアジアのキリスト教にも反映している

6. エキュメニズム（教会一致運動）とアジア

はじめに（2）

中国のキリスト教

- 20世紀以降の中国キリスト教史を理解する上でのポイント
- キリスト教の容認と国家との関係性（協調と対立）
- 三自愛国運動（自治、自養、自伝。「教会が外国ミッションの支配から解放されて、自ら教会を治め、自らの経済において立ち、自らの力によって伝道する」と地下教会（家の教会）
→ ナショナリズムに制約されたキリスト教

はじめに（3）

『世界キリスト教百科事典（第2版）』（Oxford Univ. Press）

	無宗教	民俗宗教	無神論	仏教	キリスト教
1995年	42.3%	28.7%	8.4%	8.3%	6.5%
2000年	42.2%	28.5%	8.1%	8.4%	7.1%
2025年	40.6%	28.6%	7.5%	8.5%	9.2%

はじめに（４）

- 日中韓神学フォーラムの成果を参照しつつ行われるが、このフォーラムの概要は次の通りである。
- 第1回：日本・京都、2006年11月24日～25日、
「「民族主義」を超えて—日韓の和解のためのアジア神学の模索」
- 第2回：韓国・ソウル、2007年11月23日～24日、
「日韓両国のキリスト教受容」
- 第3回：日本・京都、2009年6月26日～27日、
「東アジアにおける宗教的挑戦」
- 第4回：中国・上海、2011年5月13日～14日、
「アジアは平和か？ 現代アジアにおける平和構築と神学的創意」
- 第5回：韓国・ソウル予定（2014年5月9日～10日）

はじめに（５）

<参考文献>

1. David B.Barrett, George T.Kurian, Todd M.Johnson (eds.), *World Christian Encyclopedia. A comparative survey of churches and religions in the modern world. Vol.1* second edition, Oxford University Press, 2001.
2. 日本基督教団出版局編『アジア・キリスト教の歴史』日本基督教団出版局。
3. 丁光訓ほか 『中国のキリスト者はかく信ず』新教新書。
4. レイモンド・フン編『中国の家の教会 文化大革命を生きぬいたキリスト者』新教新書。

平和への貢献（１）

- 日中韓に共有された問いの一つが「平和」である。今回、改めて、平和という問題から議論を始めて見たい。平和とは戦争がないということを超えていかなる積極的な意味を有しているのか、また平和形成には何が必要か。

平和への貢献（２）

- 平和とは？
- エフェソの信徒への手紙 2. 14。
「キリストはわたしたちの平和であります。二つのものを一つにし、御自分の肉において敵意という隔ての壁を取り壊し」
- 和解としての平和 → 日本は平和か？
キリスト教が東アジアの平和に貢献できるかは、敵意に満ちた東アジアの現実に対して、「和解」の実現への道を示しうるかにかかっている。

平和への貢献（3）

- 従軍慰安婦問題。女性国際戦犯法廷（2000年12月、東京）の試みにキリスト教はいかに応答してきたのか。
- 国際戦犯法廷の目的、南アフリカの真実和解委員会
- なぜ、法廷か。事実と責任の追及のため。和解は、事実の解明と責任の確定を前提とする。

平和への貢献（４）

- 不当な扱いを受けた人の立場にたつ想像力。自分に落ち度があったために悪しき運命を招いたのではないかという自己否定の思いから、被害者を解放し、自己肯定を可能にする作業。あなたが悪かったのではない。責任を負うべきは別の所に存在する。

cf. 加害者の罪の赦しに対する被害者の恨みからの解放。

平和への貢献（5）

- キリスト教思想から提言可能なこと。神と人間の和解にとっての十字架の意義。

事実と責任を明確化は、和解の前提となる。とすれば、この点を東アジアのキリスト教はキリスト教思想として強く主張する課題を有しているのではないか。東アジアの諸民族が和解するために何が必要かを明らかにすることを通して、平和形成へ寄与すること。

平和への貢献（6）

<参考文献>

1. 芦名定道「東アジアにおける宗教的寛容と公共性」、紀平英作編『グローバル化時代の人文学—対話と寛容の知を求めて【下】共生への問い』（京都大学文学部創立百周年記念論集）京都大学学術出版会、2007年、279-301頁。
2. 宮田光雄『平和の思想史的研究』創文社、『非武装国民抵抗の思想』岩波新書、『日本の政治宗教 天皇制とヤスクニ』朝日新聞社。
3. 稲垣真美『兵役を拒否した日本人—灯台社の戦時下抵抗—』岩波新書。
4. 村上重良『国家神道』岩波新書。
5. 島蘭 進『国家神道と日本人』岩波新書。
6. 小熊英二『<民主>と<愛国>—戦後日本のナショナリズムと公共性』新曜社。
7. 高橋哲哉『教育と国家』講談社現代新書、『靖国問題』ちくま新書。
8. メディアの危機を訴える市民ネットワーク（メキキネット）編『番組はなぜ改ざんされたか—「NHK・ETV事件」の深層』一葉社。
9. マルゲリート・ハーマー『折られた花—日本軍「慰安婦」とされたオランダ女性たちの声』新教出版社。

キリスト教とナショナリズム（1）

- 韓国：ナショナリズムの担い手としてのキリスト教
- 日本：ナショナリズムと距離を置く（あるいは対立する）キリスト教
- 中国：日韓のいわば中間（三自愛国教会と地下教会）
- ↓
- 東アジア諸国家の対立要因がそれぞれのナショナリズムの動向に規定されているとき、キリスト教はそれぞれのナショナリズムとどのように向き合うべきか。

キリスト教とナショナリズム（2）

日本キリスト教と民族：

- 近代国家形成への精神的寄与、国家への批判的視点が希薄
- 明治国家の宗教政策：近代国家の形態＋天皇制、信教の自由と国家神道
- 「神道≠宗教」論、宗教と習俗との関係をどのように理解すべきか。

内村鑑三(1861-1930)

- 思想家、キリスト教伝道者。東京外国語学校を経て札幌農学校。クラークの残した「イエスを信ずる者の契約」(札幌バンド)に署名。M.C.ハリスから受洗(1878)。卒業後開拓使に就職、札幌教会設立。農商務省水産課勤務。84年アメリカへ。知的障碍児養育院で働く。85年、アマースト大学入学、総長シーリーの感化で<回心>を経験。ハートフォード大学入学、中退。88年、帰国。
- 第一高等中学校勤務、91年、不敬事件。退職。貧困の中、『基督信徒の慰』『求安録』など執筆。『万朝報』英文欄記者、『東京独立雑誌』主筆、ジャーナリストとして活躍。1900年、月刊誌『聖書之研究』を創刊、聖書研究会を開始。無教会主義を唱道。足尾鉍毒事件反対運動を展開。ロシア開戦の状況下で非戦論を唱え、万朝報社を退社。第一次世界大戦が起こり、近代文明を批判し、再臨運動に参加(1918-)。
- 「生涯のモットーとした2つのJ(JesusとJapan)でもわかるように、日本の思想界に日本を超越する視点を、観念的ではなく血肉化して与えた影響は、キリスト教界にとどまらない」

(『岩波キリスト教辞典』より)

内村鑑三と非戦論（１）

- 内村鑑三の二つのJ（Jesus、Japan） → 愛国とは？
- 内村鑑三の戦争論：義戦論（日清戦争）から非戦論（日露戦争以降）へ
- 日清戦争＝「義戦」（1892年の『日本人の天職』、1894年の「日清戦争の目的如何」）
- 日本の世界史的使命＝欧米の進歩的文明をアジアに紹介し、それによって保守的な東洋を啓蒙すること
 - 朝鮮の内政に干渉する清国と戦い、清国を啓蒙するのが日本の使命である
 - ＝ 東洋の近代化を時代の要請と考え、明治政府の近代化路線（＝天皇制国家の形成）をキリスト教信仰によって精神的に補完するという姿勢

内村鑑三と非戦論（２）

「＜義戦＞はほとんど略奪戦に近きものと化し、その戦争の＜正義＞を唱えた予言者は、今や深い恥辱のうちにあります。」

（アメリカの友人ベル宛の書簡）

「余は日露非開戦論者であるばかりでない。戦争絶対的廃止論者である。戦争は人を殺すことである。そうした人を殺すことは大罪悪である。そうした大罪悪を犯して、個人も国家も永久に利益を収め得ようはずはない。」

（「戦争廃止論」）

愛国（1） 国家の繁栄とは何か

- 国家・民族の繁栄とは何か。戦争によって何を守るのか。（Cf. 富国強兵）
- 「第一に戦敗必ずしも不幸にあらざる事を教えます。国は戦争に負けても滅びません、実に戦争に勝って国は歴史に決して少くないのであります、国養の興亡は戦争の勝敗に因りません、其の平素の修養に因ります、善き宗教、善き道徳、善き精神ありて国は戦争に負けても衰えません、否、其の正反對が事実であります」、
「国の実力は軍隊ではありません、将た又金ではありません、銀ではありません、信仰であります。」
（「デンマルク国の話」岩波文庫）

愛国（2）

- 高い精神的文化に支えられた非軍事的小国という理想
- 愛国の意味の転換（＝民族・愛国のメタファー化）→ 政府・国家が間違った方向に進むとき、それを批判するのが愛国である。
- 「民族＝政府」「キリスト教＝非愛国」という議論の枠組みを解体するという戦略。愛国の脱構築。

参考文献（1）

1. 芦名定道「東アジアにおける宗教的寛容と公共性」、紀平英作編『グローバル化時代の人文学—対話と寛容の知を求めて 【下】共生への問い』（京都大学文学部創立百周年記念論集）京都大学学術出版会、2007年、279-301頁。
2. 宮田光雄『平和の思想史的研究』創文社、『非武装国民抵抗の思想』岩波新書、『日本の政治宗教 天皇制とヤスクニ』朝日新聞社。
3. 稲垣真美『兵役を拒否した日本人—灯台社の戦時下抵抗—』岩波新書。
4. 村上重良『国家神道』岩波新書。
5. 島蘭 進『国家神道と日本人』岩波新書。

参考文献（2）

- 土肥昭夫
『日本プロテスタント・キリスト教史』
新教出版社、1980年。
- 関根正雄編著 『内村鑑三』 清水書院、1967年。
- 『内村鑑三全集』 『内村鑑三著作集』 岩波書店。
- 鈴木範久監修、藤田豊編
『内村鑑三著作・研究目録』 教文館、2003年。

参考文献（3）

- 塩川伸明『民族とネーション—ナショナリズムという難問』岩波新書、2008年。
- 蓮實重彦・山内昌之編『いま、なぜ民族か』東京大学出版会、1994年。
- 小熊英二『単一民族神話の起源—<日本人>の自画像の系譜』新曜社、1995年。
- 小坂井敏晶『民族という虚構』東京大学出版会、2002年。
- 大澤真幸『ナショナリズムの由来』講談社、2007年。

